

オランダNGOが考える人の手 コントロールされた自然

農業は自然を守ることに つながらない

アムステルダム南東に車で20分ほど走ると、ナーデルメーアと呼ばれる自然保護地域がある。ここを管理しているのが、自然保全を目的に活動しているNGO、ナチュールモニュメンテンだ。

このNGOが設立されたのは1905年(明治38)。今年で、ちょうど創立100年を迎えることになる。設立のきっかけはアムステルダムの都市問題だ。この時期アムステルダムは急速に人口が増え、都市域が拡大していった。そして、

このナーデルメーアをゴミ処理場にしようという計画が持ち上がったのだ。その反対運動に端を発するのがこのNGOである。結局、ナシヨナルトラストのように、ゴミ処理場計画に反対するメンバーがお金を出し合い、土地を購入して管理保全が始まった。

そのNGOも今や95万人の会員を擁するまでに成長した。オランダ家庭の4分の1が加入しているというから驚きだ。この支持を背景に、常時500人が勤務する大組織となっている。

ナチュールモニュメンテン協会のステラーホフさんは、オランダの自然保護政策を次のように説明

する。

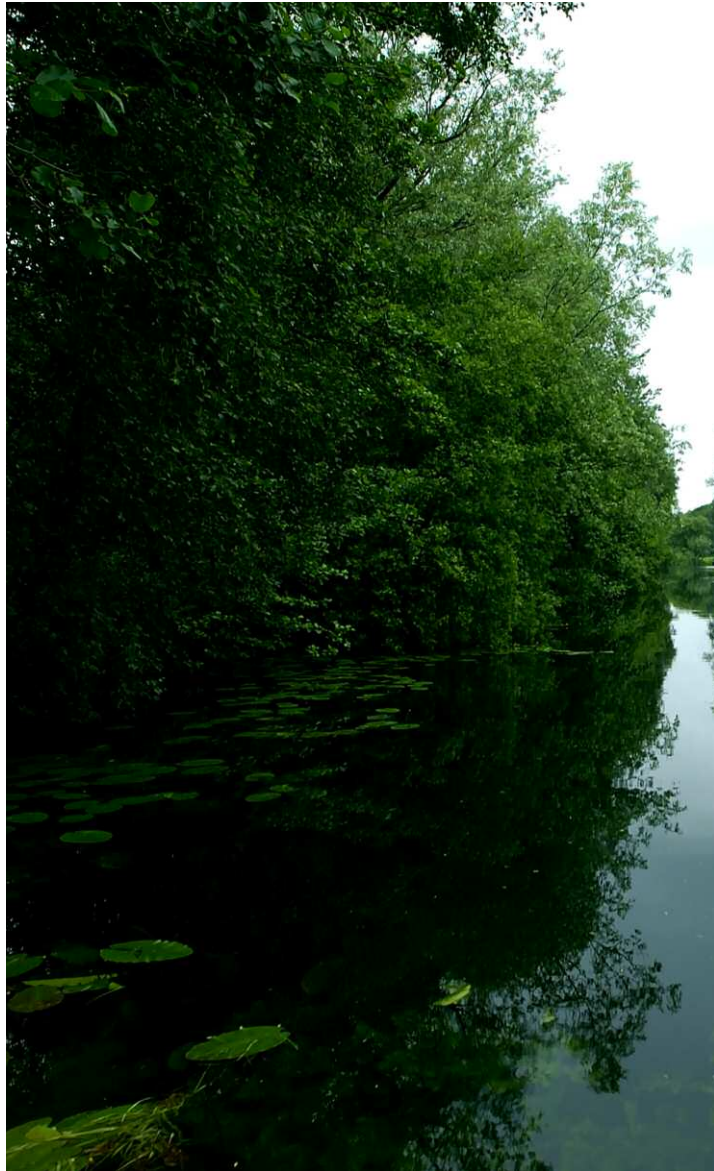
「オランダ政府は、あと25万haの自然環境を確保しないと、自然が人に侵されていくと言っています。それを、当初2000年(平成12)までに達成しようとしたのですが、3%しか達成できませんでした。その25万haをどう捻出するかは、農地を自然保護地域に転換するかありません。この25万haという数字は、政府と農家と自然保護団体の合意で出された数字です」

さらに、
「オランダの背骨は自然環境にあります。海、島々、ポルダーなど、失われそうな自然を私たちは買ってきました。しかし、買って守る

だけでは充分ではないということに気づきました。生きものが生きていくためには、それを囲む環境までケアをしないといけない。なぜかといえば、農地として使われれば水を汚し、空気を汚す。道路と交通が発達すれば環境が汚される。2018年(平成30)までには、当初の目標を達成しようとしています」

ここでは、農業も自然環境を汚す要因として意識されている。
「今のオランダ政府は、同じ温暖化の影響でも洪水のほうを問題視していますが、洪水を救うのは自然地域であって、自然地域が乾燥してなくなれば遊水池もなくなり、





ナチュラルモニュメンテン協会 ニコスさん (左) ステラーホフさん (右)

洪水は防げません。今までは洪水を防ぐのに、コストがかさむ土木工事に依存していました。しかし我々は自然地域を遊水池として保全することで、洪水を防ごうと考えています。この方法の有効性をわかっているから、オランダ家庭の4分の1が、ナチュラルモニュメンテンの会員になっているのです」

洪水を防ぐのに、遊水池は有効という観点からは、よく理解できる話だ。

ただ気になったのは、農地を守ることは、そのまま自然を守ることにもつながらるのではないだろうか。

「確かに、オランダでも100年

前は、農地を守ればよいと考えていました。100年前の農地には、確かに、草が生えていて、カエルがいて、魚がいました。でも、今は農薬等が使われたためか、草は生えないし、動物もいなくなってしまう。これは自然とはいえない」

これがステラーホフさんの答えだった。

コントロールされた自然

自然保全地帯ナードルメーアは広大な湿地帯となっており、その中に池が点在している。ボートで

中に分け入ると、水と草が生い茂った遠方には森が見え、鳥の声し

か聞こえてこないというような環境だ。環境への影響を最大限に考慮して電動ボートを使っているが、わずかなモーターの振動もスイッチを切るとまったくの静寂が訪れる。しかも水は、底まで見える透明度だ。このような所がアムステルダムから16kmの場所に保全されているのに驚きを感じる。

浄化した水を入れているから、と平然と答えるステラーホフさんにさらに訊くと、周囲の水草も定期的刈られているという。自然に遷移して森にならないように手を入れていくというのだ。

日本で、「尾瀬沼の水は浄化処理して、余計な草も刈り取ります」と言われたら、かなりの人が違和感を覚えると思うのだが、

「自然」とは違って人工的にコントロールされていても、生態系のバランスさえとれていれば、それが「自然」なのだ。日本では、使うことで生活と調和して維持されるという自然観や、何も手をつけられていないことを良しとする自然観が存在する。

このように国によって、時代や背後の条件によって自然観が変わることはよくわかる。これから目指すべき「自然」の姿とは、いったいどのようなものなのだろうか。

